

滝学園報

第7号
12月発行

Topics

横田賞
最優秀賞受賞
(高校の部)

クラブ活動
ハンドボール部の
快進撃続く

文化発表会
中3 修学旅行
中1 ウォーク

ものづくり拠点と教育

校長 光岡敏雄

今年、創立百周年を迎える学園の記念式典へのお招きが多くありました。いずれの学園の式典も工夫が凝らされており、それぞれの学園の教育思想を間近に見る思いでした。

愛知淑徳学園のコンサートを柱にした企画には、斬新な演出に次の百年への熱いメッセージと共に、都会的なセンスの学園を目指そうとする意思が感じられました。

名古屋工業大学 (www.nitech.ac.jp) の創立百周年の記念式典と祝賀会では、主催者と来賓が共に語られた「この地域が、日本のものづくりの拠点」という言葉が強く印象に残りました。学長はその式辞で、名工大は戦前の名古屋高等工業学校を母胎として創立百年を迎え、「ひとづくり・ものづくり・未来づくり」を柱に大学づくりに努め、「ものづくりの拠点」にある高等教育機関として産学連携の「知的中枢」の役割を果たしたいとの強い決意を述べられました。まさにこの地域唯一の工科専門大学としての意思表明に相応しいスピーチでした。

九〇年代のバブル経済の時期にも本業をきちんと維持した堅実経営の企業が多く、「元氣な名古屋」と注目を集めるこの地域は、「日本のものづくりの拠点」地域でもあります。

その大きな柱の一つが自動車産業です。そこでは何万点もの部品が最終ラインで組み立てられ、製品の自動車に仕上げられます。部品の多くは、外部の部品メーカーからジャスト・イン・タイムで製造ラインに納入されます。供給企業もエンジンやボディーは金属、タイヤは化学、電気系部品は電気・機械、内装部品は化学・繊維、各種センサーはITなど多岐にわたっており、自動車産業はとて多岐にわたる広い産業でもあります。

例えば、ボディーにはより薄くて強く、衝撃を吸収し、ガラスの鏡と同じ滑らかな塗装面をもつ鋼板が求められます。確かに、ボディーに映る自分の姿が、遊園地のお遊び凹凸面鏡のそれになるような自動車を購入しようとする人はいないでしょう。簡単に思えるこの鋼板の製造技術は、とても高いものなはずです。自動車産業をハイテク産業とはよばないでしょうが、燃料電池自動車など近未来の自動車開発に思いを致せば、自動車はハイテクの塊とも言えるでしょう。

ハイテクと言えば、あのH-II Aロケットは私たちの街で作られているのです。飛行機生産も含めて、この地域は日本の航空宇宙産業の拠点とも言えます。ハイテクを含む高い技術を備えた幅広い企業群の存在が、この地域を「ものづくりの拠点」と位置づけているのは間違いないでしょう。

一方、銚子時代からの瀬戸・美濃の陶磁器産業を基盤に、工業材料としての各種セラミックスの開発・生産もさかんに行われています。研究施設の一つである、熱田神宮近くの財団法人「フアインセラミックスセンター」のホームページ (http://www.ficc.or.jp) を開けてみると、セラミックスの用途の広いことに驚かされます。それは、瀬戸市のセラミックス産業を紹介したホームページ (http://www.city.seto.aichi.jp/ceramics/) でも同様です。



資源小国であるわが国は、将来も「技術立国」として世界経済の中で高い地位を確保することが重要であることは論を待たないところです。技術の開発や生産に高い水準を維持するためには、多くの優秀な若者に、それらの道での活躍を期待しなければなりません。この地域には、企業との共同研究などでの産学連携を重要な教育活動に位置づける大学は、理科大学に限らず数多くあります。この地域が「技術立国、日本」を支える「ものづくり拠点」であることは、多くの若者が活躍できる場所を提供してくれるとも言えます。

私は、諸君達がそれぞれの特性を最も生かせる仕事に就くことの大切さと共に、「ものづくり日本」のリーダーとしてこの地域で活躍をしてくれる人が一人でも多く出ることを願っています。

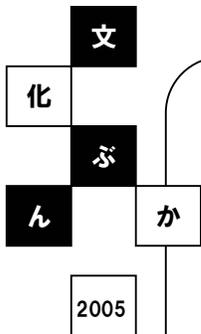
今年度の長月祭・文化発表会では、多くの「初」を試みることにした。

初めての高校・中学合同開催。それに伴う合同企画が盛り沢山。なかでも、中一から高三までの約一〇〇名が集ったの群舞は、そのスケールと地道な練習が美り、大成功。平和企画として、写真家 広河隆一氏を招いて講演も実施。

チケット制による招待で、初日には、保護者や学校関係者など、二二〇名ほどが来場。南門近くには、保護者主催の模擬店が所狭しと並び、期間中限定の「太っ腹通り」ができた。

一方で、ゴミの分別や駐車場の整理の仕方など、諸問題も散見された。

様々な経験を積み上げ、地域に向けた情報発信ならぬ、「文化発信」ができるよう、私たち全員の手で、学校祭を創りあげていきたい。



私は科学のコーディネーターになりたい。私は、生身の人間が取り扱う科学には二つの問題があると思う。一つは、科学が独り歩きしてしまうという点である。科学には、ともすれば科学者の趣味の領域に取り込まれてしまう部分がある。そして、科学者が好奇心の赴くままに科学を追求した結果、人々が大きな危険にさらされてしまうことがある。その最たる例が、原爆である。原爆の開発に携わった科学者の中には、自分は研究に従事しただけなので、それが招いた結果に責任を負う必要がないと言う者もあつたという。また、最近ヒトゲノムが解読されてしまった。そのことで人々が不安を抱くのは誰の責任でもないのだろうか。このように、一般の人々の意思と離れた科学の結果は脅威である。

それなら人々の希望に沿った科学なら安全なのかというところ、そういうわけでもない。私が考える科学の問題点のうち一つは、科学が人間のあらゆる欲求を満たしてしまうという点である。人々のニーズに応えることは金儲けにもなるので、この問題は営利主義とも関係がある。そもそもプロイトによれば、

迅速な法整備が求められる。利潤のために規則を破るなどもつてのほかである。

私は科学を見直すために、大学に行つてある一つ分野を掘り下げるのではなく、広範な科学の知識を勉強したい。留学するのも物事を多角的捉えるのに役立つと思う。そして、哲学も学びたいと思つている。というのは、今の科学の、物事を主体と客体に分ける、普通の真理のみを追求する、倫理のような曖昧なものも排除する、などの特徴は、哲学が定義したもので、科学を概念から理解する助けになると思ふからである。そして、なるべく多くの人と意見を交換したい。そうやって、広い視野で物事を考えることのできる人間になりたい。

今季戦績	15-2
対犬山東	19-12
対布袋	13-5
対犬山城東	26-1
対岩倉	23-10
対扶桑	27-8
対古知野	15-8
【管内大会優勝】	
対神守	13-7
対美和	19-12
対今伊勢	24-18
対佐屋	11-30
対尾西第一	16-19
【西尾張大会準優勝】	
対神沢	16-19
【県大会初出場】	



創部2年目 県ベスト16に

ハンドボール部は、学校から少し離れた、第四グラウンドで活動する。中学用コートは、本来の三分の一度程度のスペースしかないが、日々、精力的に基本練習を繰り返している。これまでは、他校上級生の厚い壁にはねのけられ、苦しい思いだけを抱いてきた。しかし、同学年の戦いとなった今季は、これまでの鬱憤を晴らすかのような快進撃。なにか秘策でもあったのだろうか。

一同、同じグラウンドで活躍する高校の先輩たちにもまれたり、強豪校の胸を借りたり、とにかく経験を積んできました。協力し合ってきた皆さんに感謝したいです。と、主将の後藤君。

「夏の東海大会出場です。」

次の目標は？と聞かれ、顧問の松野教諭を見ずに答えた姿が頼もしかった。

Taki HANDBALL team

今季新人戦、やや劣勢という下馬評をひっくり返し、見事地区三連覇という快挙を成し遂げた。今こそ、輝かしい戦績で内外の注目を集めるが、遡ること七年。まさにゼロと呼ぶにふさわしい環境で、顧問の坂野教諭によって生み出されたクラブである。荒地でも自ら開墾し、自費で用具を揃え、雨の日も雪の日も練習し続けた。ハンドボール王国愛知のトップチームに迫る彼らに、顧問の言葉は温かくも厳しい。

「尾張三年連続優勝という偉業をきみたちは成し遂げてくれた。二年連続優勝そして県ベスト8の先輩の偉業をひきつづき、いやでもかかる周囲からのプレッシャーをはねのけ、本当にすばらしい結果を残してくれた。昨年より体格はないが、その分をチームワークで乗り切った。僕自身も今大会、きみたちを信じ抜いて戦ってきた。三年連続優勝もうれしいが、このチームで勝ち取った優勝の喜びは、何物にも変えがたい。

しかし、今日、この日が新たな目標へのスタートである。尾張を代表して県大会に臨むという「重み」を忘れてはいけない。

試合後の選手たちの表情を見て、自分自身、新たな使命感がふつふつと沸いてきた。まだまだ続

新人戦3連覇 王者君臨す



「戦いの日々。上を目指して戦い続けよう。」

練習後、明日のために雪をかきわける選手たち。自分を高めるために、自らが動く。黙々と動かしその手が、栄冠を握る日はそう遠くはないだろう。

（県大会は、一月二十一日 名古屋市体育館にて）

横田賞受賞作品 □□□ 将来の希望

優秀賞は本人による簡易版

コーディネーターになりたい。そして窮極的には、地球上の全ての人間の永続的な利益のために、科学は何ができるのかを模索し、自分なりの解答を出すことを、一生の課題にしたいと思う。

人間の本能は壊れているという。その証拠に、動物は必要以上の食べ物を食べないが、人間は食べ過ぎて肥満になる。こんな人間の欲求を満たすのは、穴のあいた鍋に水を満たすようなもので、そんなことに科学を利用したら資源が枯渇するのは当然である。

そして、科学そのものではなく、科学の周辺にも問題があると思う。特に日本では、まだ個々の分野の敷居が高く、他の分野との情報交換も少ない。また、日本は他国に比べ保守的で、現行の制度を変えたいがらない。日本が、インターネットによる犯罪が増えているのに法整備が緩慢で、欧米で早くから危険視されてきた石綿を長い間開放しておいたのは、これらのことが関係していると思う。

私は、科学とは長い目で見て人間の利益となるものであるべきだと思う。それは同時に、科学が地球全体の利益につながるなければならないということでもある。

これまでの科学は無計画にひたすら掘り下げられてきた。掘り当てた物が金の鉱脈でも、毒ガスでも

優秀賞 中学三年D組 中川夕紀子

「私の夢は同時通訳者、翻訳家になることだ。海外の作品を日本に紹介する『輸入』の仕事だけでなく、日本のことを海外に紹介する『輸出』の仕事もやってみたい。最近、日本を舞台にした映画や日本の漫画が世界で注目されているが、もつと日本のことを知って欲しい、日本を、私自身を世界に認めさせたい。それが、同時通訳者、翻訳家を目指す理由だ。私は今、夢に向かって一歩ずつ前進している。英語の資格試験への挑戦、英字新聞や英語の小説の多読、自分で工夫しながら取り組む翻訳練習など、日々、自分なりに努力をしているが、難しさのあまりくじけそうになるときもある。『自分の身長の高さの英文を読め』これは、ある英文記者の言葉で、たくさんの英語に触れるうちに、文法、単語、英語特有のニュアンスなどが自然と身に付いてくるという意味だろう。しかし、私にはかつこの意味があるような気がしてならない。つまり、これだけたくさんの英文を読んだと思うことで絶対的な自信が付き、困難に直面することがあっても前向きに対応できるようになるという意味だ。この言葉を胸に、確実な実力と自信を身につけ、いつの日か、私が携わった作品をきっかけに、海外または日本に興味を持ってもらえる人がいてくれたらうれしい。私の好きな仕事に共感を持ってもらえる、それが私にとって最高の幸せであると思う。」

何でも良かった。ただ掘り進めさえすればよいのだと信じられてきた。

私は、科学のこのようなあり方に反対である。科学は、計画的に、きちんと安全確保がなされた上で進められるべきである。私は科学が害とならないために、以下のことが大切だと思う。

第一に、科学者が、科学が人間、そして地球全体に与える影響を自覚すること。それには、あらゆる事態を想定する能力が必要である。吸入した石綿が体内に蓄積されたらどうなるか、子供がインターネットを利用したらどうなるか、というように。第二に、個々の分野の敷居を低くして情報交換を積極的に行うこと。石綿のように、ある分野において便利だとされていても、危険な物質は早急に除かなくてはならない。また、分野を超えた交流は、一つの分野の独り歩きの歯止めにもなるし、全く関係がないと思つていた分野の研究が、自分の分野に思わぬヒントを与えるかもしれない。第三に、保守的な態度を改めること。嫌でも毒ガスを掘り当ててしまふことはある。そんな時人々を危険から守るために

原爆投下中心地に立ち、60年前を思った。

「ここに原爆が落とされたんだ。
そして、それはあってはならない事だったんだ。」



私が修学旅行で一番思い出深かったのは、やっぱり原爆投下中心地だ。私たちの班は最初に山里小学校へと足を進めた。名古屋にあるような小学校とは全く違い、まるで大学かと思わせるような赤いレンガ造りの立派な学校。初めは「すごい！」の連発だった。その立派な小学校の片隅に、防空壕があった。今となっては崩れないようにと修理されており、中は立ち入り禁止だった。近くにあって看板を見たら中はかなり広くて驚いた。山里小学校の正門を出て、次の目的地へ行くこうとしたとき、花壇に板が置いてあるのに気づいた。そこには次のように書かれていた。
「ここに生えている雑草は抜かないでください。この土の下には、原爆でなくなってお兄さんやお姉さん達がたくさん埋まっています。この草に集まった虫たちの声を聞かせてあげられるためです。」私はこれを読んで胸がつまり、言葉が出てこなかった。

旅

中 3 修 学 行



十月十一日〜十四日の日程で、九州は長崎方面へ。生徒に強い印象を残したのは、やはり、語り部の下平作江さんの被爆者講話や平和公園、原爆資料館、そして山里小学校など、戦争の悲惨さと平和の尊さを学ぶところでした。
その他、佐賀の嬉野で行った手びねりは、旅行から帰ったあとに作品コンテストがあり、今回の修学旅行は長く楽しめるものとなりました。

歩

こ

う

ひとの手というものは決して同じものを作ることはできない。だからこそ、こちら側にも選ぶ楽しみがうまれるのだ。そしてきっと、その中になにか想いをつめることができるのだろう。

何時間も一緒に歩いていると、言葉を交わさなくても、視線だけで気持ちがわかってしまう。以心伝心。そんな言葉が浮かんできた。お互いが理解してこそ生まれる親近感。そんなものが日常生活でも作れたらいいな。

「こんにちは」「さようなら」
いつもは、こんなに元気に言えてないはずなのに。自然に言葉があふれ出る。思わず笑いがこぼれ出る。他人と触れ合えた。できるんだ、私にも。



11月11日 今年の中1ウォークは馬籠〜妻籠ルート。自然に包まれ、散策気分で15kmを踏破。古い町並みから、かの地の歴史に思いを馳せる姿も。